

想像画制作法における『題材論的方法』の研究

“Thematic Method” Research with the Imaginative Painting Methods

立原慶一

美術教育は人間形成上、その効果を判然と示しえないのではないかという現状と、造形表現では表したいこととしての絵画的イメージが重要である、という考え方の双方を踏まえて新たな活路を開くべく「想像画」題材を高校生に与える。そして彼らにおける「主題表現（主題の造形表現化）」と、その成果である「主題形成（主題の造形表現化に成功し、作品から感じ取られるべきもの）」が研究対象として考察される。

その中で第一に、生徒の視線が自己の内面（自己意識）や、社会的文化的現実へ届けられるような題材が考案されること、第二に、人間形成の視点から取り上げられたこの種の題材が、想像画的制作法の線に沿って実践されると、教育的意義と成果が一段と向上する事情が明らかとされた。それは題材論的方法と命名される。そこではなぜ主題表現法として想像画的制作法が選ばれるのだろうか。それは単一画像に制約されている観察画的制作法に対して、複数の画像や映像を互いに関連づけそれらを合成することで、意味の連関と統一としての物事が表現されうるからに他ならない。

かくて学校美術教育が今後に進むべき、一つの方向性が確認される。それは教師から与えられた知性的題材に動機づけられた形で、生（生きること）や世界との関係の意味に対して知性と想像力を働かせることによって、主題形成を画面に結晶化させることを主な活動内容とすべきである。その実践的方法論では、自分の作品に首尾良く実現された主題形成や、その表現性に触発されて生じる美的内容が見つめられる。そのことでこれまでの自己が変革され、精神と生活において自分がどうありたいのかの、別の生き方の可能性が拓かれてくるのである。